

【論文】

小・中学生の生活体験やキャンプ経験が 主体的積極的行動傾向に与える影響

谷井 淳一

(国立オリンピック記念青少年総合センター)

The effects of life experiences or camp experiences on
an aptitude to active behavior among elementary or
lower-secondary school children

TANII Junichi

(National Olympics Memorial Youth Center)

【要旨】

学年が進行するに従い、さらにテント泊経験が多い程、野外体験、調理体験、工作体験はそれぞれ増加し、そして、これらの体験が豊かな程、キャンプ中の積極性やリーダーシップ行動を意味する「主体的傾向（主体的積極的行動傾向）」は高くなることがわかった。この主体的傾向は「生きる力」の一部をなす行動傾向であると考えられ、生きる力の育成に自然・生活体験が重要な役割を果たすことが部分的ながら実証された。また、主体的傾向は学年の増加に伴って増加しないことから、集団の中でリーダーシップを発揮したり積極的な行動をとることが困難な状況に今の青少年が置かれていることが推察された。

工作体験は、小4時点では男子に比べ女子が低かったが、中1ではいったん男女差がなくなった。しかし、中2以降再び男子の工作体験が高くなった。小学校高学年の女子は性役割にとらわれずに工作体験を増加させるが、中学生以上になると、キャンプ生活の中で、工作役割を男性の役割ととらえ、積極的に取り組まなくなる傾向があると考えられた。すなわち、中学1年から2年にかけて女子の性役割意識の重要な転換点があることが示唆された。

【キーワード】

リーダーシップ行動、生活体験、キャンプ、性役割

I 問題

第15期中央教育審議会⁽¹⁾は、第一次答申において、これからの教育の在り方として、「生きる力」を育成することが重要であると指摘しており、この考え方は第16期中央教育審議会⁽²⁾にも継承されている。この「生きる力」とは、「いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であ

り、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性である」としている。一方、このような「生きる力」をはぐくむためには、「自然や社会の現実に触れる体験が必要で」あり、「子どもたちに生活体験や自然体験などの体験活動の機会を豊かにすることは極めて重要な課題となっている」としている。

青少年教育活動研究会（代表：斎藤哲郎）⁽³⁾は、自然体験・生活体験が多い子ども程、近所

の人へのあいさつや、家での洗濯やそうじなどの手伝いといった生活態度がよいことを報告し、また、青少年教育活動研究会（代表：平野吉直）⁽⁴⁾によると、自然体験・生活体験が豊富な子ども程、お手伝いや生活習慣および道徳観・正義感が身についているとしている。さらに、子どもの戶外活動研究会⁽⁵⁾は、戶外活動の好意度の高い子どもは、自尊心・社会的スキルおよび学習・知的好奇心が高いとしている。また、安原・藤土・小柳⁽⁶⁾によると、自己教育力の要素と考えられる自信や精神的強さ、安定性、意欲、対人関係能力などは、単に過去の生活経験の多さによるものでなく、その経験が自主的に行われたかどうか重要であるとしている。

三浦⁽⁷⁾は、子どもたちの自然接触体験や異年齢の縦集団体験・自発的活動体験の欠損を指摘し、それを補うものとして教育キャンプの効用について述べている。飯田・井村・影山⁽⁸⁾は、小学4・5年生を対象とした冒険キャンプを実施し、キャンプ経験は参加児童生徒の自己概念を向上させる傾向があり、とくに女子の達成動機に顕著な向上が見られるとしている。また、リーダーシップ行動について、倉本⁽⁹⁾は、キャンプにおける同一条件のプログラムの中で、小学5年生より小学6年生で高いリーダーシップ行動がみられたとし、飯田・遠藤・平野⁽¹⁰⁾はキャンプ中の危機的場面でのリーダーシップ行動で高学年児童に高いリーダーシップ行動が見られたと報告している。

このように、自然体験・生活体験およびキャンプ経験と子どもの生活態度・リーダーシップ行動等の関連に関する知見がこれまで蓄積されてきたが、十分なものとはいえない。

これら自然体験・生活体験等の性や学年による違い、「生きる力」の一部をなすと考えられる行動傾向との関連等について調査し、分析検討を加えることは意義深いと考える。

II 方 法

1 調査対象

全国青年の家協議会加盟および全国少年自然の家連絡協議会加盟の410の青少年教育施設に1998年の夏休みに行われる主として児童生徒を対象とする4泊5日以上のカンパの実施予定を調査した。回答のあった396施設のうち実施を予定していたのは91施設（実施率23.0%）であった。2施設は共催であったため一方のみとし、90事業を対象に以下に示す調査を実施したところ、66事業（回収率72.5%）から回答を得た。そして、これらの事業に参加した小・中学生のうち有効回答者2,928人を分析対象とした。

2 調査内容および実施方法

調査はキャンプ中の安全に関する基礎データを得るため、「けが・病気の発生状況」等の実態を調べることを主目的として実施されたものである。それと同時に限られた内容ではあるが、けがの発生に影響を与えられられる自然・生活体験や参加者にキャンプ経験を通じて獲得することが期待される行動傾向等を調査し、それらの関連の検討を行うことにした。調査票は両面印刷されており、おもて面が調査票A、うら面が調査票Bであり、以下の内容を問うている。

(1) 調査票A

参加者の属性、テント泊経験、初日の体調、参加者の生活体験等や行動傾向などからなり、キャンプの初日に班毎に実施した。生活体験等はキャンプ生活及び日常生活の中から、野外炊事場面、調理場面、工作場面、野外活動場面等のけがが起りやすいと考えられる場面での体験を13項目とりあげ、4件法で問うた。行動傾向は「生きる力」の一部をなすと考えられる行動傾向のうち、特にキャンプ等の自然体験活動や集団活動を通じて獲得することが期待され

る、集団活動での、リーダーシップ、企画力、ルール遵守、決断力等を含む10項目をとりあげ、「よくあてはまる」「あるていどあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の5件法で問うた。

(2) 調査票B

キャンプ中のけが・病気の発生状況（種類、原因、発生日時、参加姿勢、場所、活動プログラム）を問うものであり、救護係にけが・病気を申し出る度に班リーダーが当該児童生徒に聞き取り調査した。調査票Aと調査票Bは両面印刷されており、同一児童生徒が2回以上けが・病気を申し出た場合は調査票B予備用紙を用い、けが・病気1件毎に1枚の用紙に記入することとした。調査票Bに関する分析結果の一部は、谷井・井上⁽¹¹⁾によりすでに報告されている。

Ⅲ 結果と考察

1 性別・校種別・テント泊経験別参加人数

参加者のテント泊の経験を「はじめて」、「2回目～4回目」、「5回目以上」の3水準にまとめて、校種別・性別と合わせて人数の内訳をみた。4泊以上のキャンプを対象としたためか、「5回目以上」の参加者が全体の34.0%を占め

表1. 性別・校種別・テント泊経験別参加者数 ()内は%

		は じ め て	回 2 目 4	以 5 回 目 上	小 計	無 回 答	合 計
男 子	小学校	247	549	352	1148	50	1198
	中学校	37	129	187	353	10	363
	小 計	284	678	539	1501	60	1561
女 子	小学校	300	471	301	1072	40	1112
	中学校	41	116	89	246	9	255
	小 計	341	587	390	1318	49	1367
合 計		625 (22.1)	1265 (43.9)	929 (34.0)	2819 (100)	109	2928

るなどテント泊経験が豊富な参加者が多い。このことは、テント泊や生活体験の青少年に与える影響を検討するためという本調査の目的に照らして有利な条件と考えることができよう（表1）。

2 生活体験等に関する因子分析

生活体験等13項目について、「よくある」を3点、「ときどきある」を2点、「一度はある」を1点、「ない」を0点として得点化し、主因子法・バリマックス回転を用いて因子分析したところ、解釈可能な3因子が抽出された。第1因子は、野外でマキ割りをしたり、マキに火をつけてご飯を炊いたり、あるいは長時間の山歩きをしたりという体験であり、「野外体験」と命名した。第2因子は、包丁や鍋・フライパンを使った料理や皿洗いなどの体験であり、「調理体験」と命名し、また、第3因子は、ノミやノコギリを用いた工作活動の体験であるため、「工作体験」と命名した。なお、以下で因子合成得点を算出する際、表中に*印をしるした項目の合計点とした。採用した項目について尺度の内的整合性を示す α 係数を算出したところ、「野外体験」は0.81、「調理体験」は0.73、「工作体験」は0.66で、信頼性が確認された(表2)。

3 行動傾向に関する主成分分析

キャンプを通じて得られると考えられる望ましい行動傾向を表す10項目に関して、主成分分析を試みた。因子負荷の小さい5項目を削除し、残りの5項目について再度主成分分析したところ、説明率は39.6%ながら1因子構造をとることが確認された。また、項目の信頼性についてもまずまず満足いく結果（ α 係数が0.60）を得た。この因子は、負けず嫌いで、積極的に班長やリーダーを引き受け、また、何かする時に、自分が中心になって決定し、計画・準備などを進めることを好む傾向を示していることか

表2 自然・生活体験の因子分析

項目番号および項目内容		F1	F2	F3	h ²
野外体験	* (10) やがいでマキにじぶんが火をつけたことがある	.76	.11	.26	.66
	* (12) やがいでごはんを炊いたことがある	.69	.21	.11	.53
	* (11) ナタを使ってマキを割ったことがある	.63	.08	.29	.48
	* (9) 3時間以上の山歩きをしたことがある	.56	.13	.23	.38
	* (7) 知らない場所へ地図を頼りに行ったことがある	.48	.23	.25	.35
	* (8) カヌー・手こぎのボートなどをこいだことがある	.45	.12	.25	.28
	(13) 虫または動物を飼ったことがある	.18	.13	.14	.07
調理体験	* (1) ほうちょうを使って料理をしたことがある	.10	.81	.18	.69
	* (5) なべやフライパンを使って料理を作ることがある	.16	.74	.14	.59
	* (6) 皿洗いなどの手伝いをよくする	.14	.50	.03	.27
工作体験	* (2) ノコギリを使って工作をしたことがある	.30	.13	.69	.58
	* (3) ノミなどの道具を使って工作をしたことがある	.37	.12	.53	.43
	(4) マッチで火をつけたことがある	.33	.20	.33	.26
	因子寄与	2.62	1.68	1.28	5.58
寄与率 (%)		23.8	15.3	11.6	50.7

表3 行動傾向の主成分分析

項目番号および項目内容		F1
主体的積極的 行動傾向	* (2) 何でもひとに負けたくないほうだ	.68
	* (1) 何をして遊ぶかを自分がきめる方だ	.65
	* (8) 班長やリーダーに選ばれるとうれしい	.64
	* (6) 何かする時、自分でケイカクしジュンビすることが好きだ	.62
	* (7) 登れそうな木やがけなどがあると登りたくなる	.53
	因子寄与	1.98
寄与率 (%)		39.6

ら、「主体的積極的行動傾向」と命名した。なお、削除した項目は、例えば、ルール遵守などの項目である。この種の行動傾向は、主催者側からすれば望ましい行動傾向であり、集団活動を通じて身につけて欲しいと期待するものであるが、自然探究を積極的に行おうと意図して参加している児童生徒にとっては、行動を抑制するアンビバレントな側面をもつ。また、同一人物でも時と状況によって一貫した回答となりにくい行動傾向であるといえる（表3）。

4 生活体験等及び行動傾向の因子合成得点による検討

(1) 統計処理の方法

統計処理の方法について、少し専門的なことを以下の十数行に示すが、統計に詳しくない方はこの部分については読み飛ばしてもわかるようにそれ以後には記述している。まず、生活体験等に関する3因子および行動傾向の1因子について性別・学年別・テント泊経験別に因子合成得点の平均値と標準偏差を算出し、3要因（性×学年×テント泊経験）分散分析を行った。ただし、学年が6水準、テント泊経験が3水準

表 4 自然・生活体験及び行動傾向の3要因分散分析 (F値)

	性	学年	テント泊経験	性×学年	性×テント泊経験
(自由度)	1	5	2	5	2
野外体験	112.5***	29.7***	198.7***	n.s.	7.7***
調理体験	284.9***	5.7***	27.2***	n.s.	n.s.
工作体験	136.2***	23.4***	28.6***	3.15***	n.s.
主体的積極的行動傾向	12.7***	n.s.	15.3***	n.s.	n.s.

***p<.001

で、これらを組み合わせた影響は複雑になりすぎるので、性、学年、テント泊経験それぞれの主効果と、「性×学年」、「性×テント泊経験」の交互作用のみを扱うことにした。サンプル数が多い点を考慮して有意水準を0.1%に設定し、有意差が見られた場合には、Tukey法・t検定等を用いて下位検定を行った(表4)。

検定結果については表4にまとめて示したので、以下の本文中にはこれらの数値は示さずできるだけ平易に論じることにした。なお、「野外体験」得点は、4件法で3~0点と得点化した項目が6項目あるため18点満点、「調理体験」得点は同様に3項目の合計点のため9点満点、「工作体験」得点は同じく2項目のため6点満点である。また、「主体的積極的行動傾向(以下では主体的傾向と略記する)」得点は、5件法で4~0点と得点化した項目が5項目あるため20点満点であり、最低点はすべて0点であ

る。

(2) 野外体験の比較

「野外体験」について、性、学年、テント泊経験の主効果と性×テント泊経験の交互作用が有意であった。ここで性(学年)の主効果が有意であるとは、性(学年)の違いで平均値に有意な違いが見られることであり、交互作用が有意であるとは、例えば、男女と学年(テント泊経験)を組み合わせたときに数値的に異なる変動が見られるという意味である。図1を用いて学年の主効果について説明すると、小5(5.89点)から小6(7.23点)、小6から中1(8.68点)にかけて有意な増加があり、中1以降については微増しているように見えるが統計的には有意な差ではなかった。性×テント泊経験の交互作用(性とテント泊を組み合わせた影響)について図2を用いて説明すると、テント泊経験が今回「はじめて」の参加者では、男女の野外

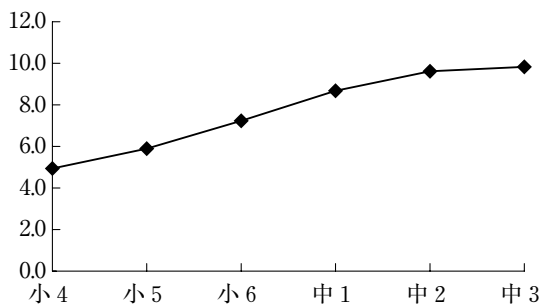


図1 学年別「野外体験」

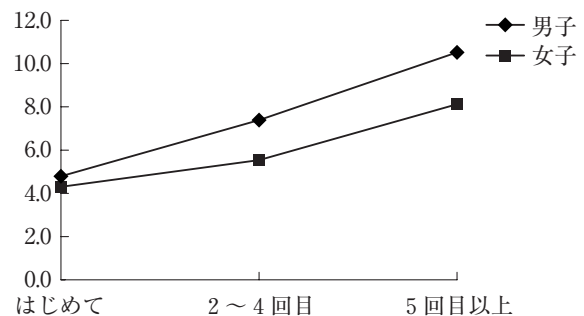


図2 性別・テント泊経験別「野外体験」

体験に有意差は見られない(男子4.79点と女子4.30点の差は誤差の範囲の変動)が、テント泊が「2～4回目」(男子7.39点, 女子5.54点)と「5回目以上」(男子10.52点, 女子8.12点)の場合は、男子の野外体験が女子に比べて有意に高かった。男女ともにテント泊の増加に伴い野外体験について有意な増加が見られることと合わせて考えると、男子の体験の増加率が大きいいため、テント泊2回目以上で男女間に有意差ができたと考えられる。このことは、野外でのマキ割りやマキに火をつけての炊飯, 長時間の山歩き等の「野外体験」に関して、男子の方がテント泊1回あたりで多くの体験を得ていることを意味する(図1, 図2)。

(3) 調理体験の比較

「調理体験」については、性, 学年およびテント泊経験の主効果が有意であった。図3は本来は交互作用を説明する図であるが、この図で性と学年の主効果を説明する。すなわち、性別では、男子全体の平均が6.16点, 女子が7.34点であり、女子の方が「調理体験」が高い。また、学年別では、「小4(6.13点)から小5(6.49点)」、「小5から小6(6.88点)」にかけて有意な増加が見られ、小6以降は増加が見られなかった。テント泊経験別のデータは図では示さないが、「はじめて」(6.48点)および「2～4回目」(6.57点)の間では有意差はなく、それらと「5回目以上」(7.06点)の間に有意な差が見られた。包丁やなべ・フライパンなどを

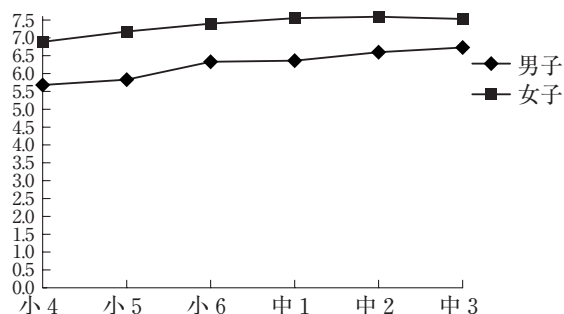


図3 性別・学年別「調理体験」

使ったの料理や皿洗いなどの「調理体験」は、日常的な体験であり、自然の中でしか得られない体験ではない。従って、数回のテント泊経験では大きな体験の増加にはつながらないのであろう。しかし、5回目以上の参加者になるとわずかではあるが調理体験が増加している。テント泊の積み重ねにより調理行動の習熟度が高まり、それが体験の増加につながっている可能性もありうる(図3)。

(4) 工作体験の比較

「工作体験」について、性, 学年, テント泊経験の主効果と性×学年の交互作用が有意であった。図4について、性×学年の交互作用が有意であったので、男女別に学年間(6水準)の平均値の比較を行い、さらに学年別に男女の平均値の比較を行った。男子では、「小5から小6」と「中1から中2」の間に有意な増加が見られ、その他の連続する学年間の平均値に差はなかった。女子では、「小4から小5」と「小6から中1」の間に有意な増加が見られ、その他の連続する学年間の平均値に差はなかった。学年別に男女の平均値を比較すると、中学1年時のみ男女の得点に有意差(男子3.58点, 女子3.18点)であるがこの差は誤差の範囲の変動)がなかったが、他の学年ではすべて男子の体験が女子の体験に比べて高かった。すなわち、これらのことをまとめて説明すると、工作体験は、小4時点で男子が2.44点, 女子が1.23点と2倍程度の有意な差がある。しかし、その後女子の

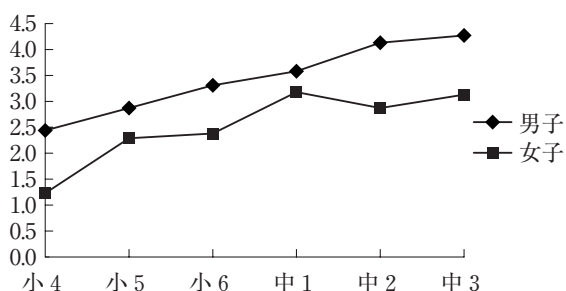


図4 性別・学年別「工作体験」

得点の増加が大きく、中1では男女差がなくなっている。しかし、中2以降再び男子の工作体験が高くなり、男女の体験の差が開いている(図4)。

このことは小学高学年で積極的に工作体験を重ねていた女子が、中学生になるとキャンプ生活の中で工作役割を男性の役割ととらえ、積極的に取り組まなくなる傾向の表れと考えられた。すなわち、中学1年から2年にかけて女子の性役割意識の重要な転換点があることが示唆された。東・小倉⁽¹²⁾は、間宮⁽¹³⁾、Smith, S⁽¹⁴⁾、遠藤・内藤⁽¹⁵⁾らの研究を例にあげ、中学2年の時期に性役割観の転換期があると述べている。すなわち、間宮⁽¹⁶⁾は、能力の評価に関して、小学4年から中学1年までの段階では、男女はいずれも同性のほうが優位であると評価しているが、中学2年の段階では男性のほうが勝るといふうに、評価に転換がみられるとしている。また、Smith, S⁽¹⁷⁾は社会的望ましさの評価について、8歳から15歳までの児童生徒が、最初は同性を高く評価するが年齢の増加とともに男子をポジティブに女子をネガティブに評価するようになるが、その転換点はやはり14歳(中学2年)であるとしている。キャンプ経験との関係を扱った研究においても、関・飯田・橘⁽¹⁸⁾では、小学5年から中学1年にかけて、男女ともにキャンプ経験により両性役割志向へと変化しており、関・飯田・岡村⁽¹⁹⁾は女子高校生の場合は逆にキャンプ経験が性差意識を強めたこと

を報告している。キャンプ経験の性役割意識に果たす影響が学校種・学年により異なるというこれらの結果は本研究と合致した結果だと言える。

ところで、このことは、中学2年以降の女子に工作役割を男性役割としてとらえる傾向があるぶん、工作体験の豊富さがこの時期以降の女子にとって性役割意識をこえた積極性の指標としての意味を持つことを示唆している。

一方、テント泊経験別では、図は省略するが、「はじめて」の参加者の平均値が2.42点、「2～4回目」が2.76点、「5回目以上」が3.30点で、テント泊経験が多くなるほど「工作体験」が増加している。工作体験も調理体験と同様、日常生活の中でも得られる体験ではあるが、この結果は工作体験がテント泊といく分結びつきの大きい体験であることを意味しているのだろう。

(5) 主体的傾向の比較

「主体的傾向」については、性とテント泊経験の主効果が有意であったが、学年の主効果は有意ではなかった。図5にて性と学年の主効果の説明を行う。すなわち、性別では、男子が12.29点、女子が11.68点であり、男子の方が「主体的傾向」が有意に高いが、数値的にはそれ程大きな差ではない。また、この傾向については、男女ともに学年差が見られず、小学校4年生から中学校3年生まで、発達的变化がなかった。図6に示すように、テント泊経験別で

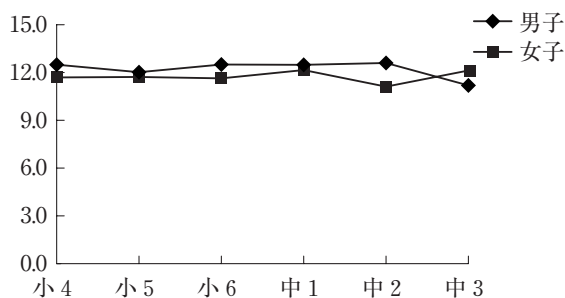


図5 性別・学年別「主体的積極的行動傾向」

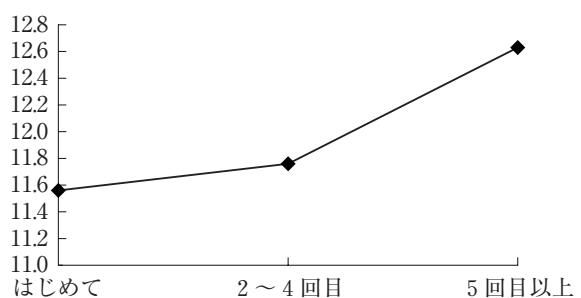


図6 テント泊経験別「主体的積極的行動傾向」

は、「はじめて」(11.56点)と「2~4回目」(11.76点)では有意な差がなかったが、これらと「5回目以上」(12.63点)では有意な差がみられた。すなわち、テント泊経験が一定程度多い場合に、主体的傾向は高くなっている。このことは学年の増加は何らかの抑制作用から必ずしも主体的傾向をストレートに増加させないが、テント泊経験はこの抑制作用を緩和し、主体的傾向を育成する働きをする可能性を示唆している。学年差については、倉本⁽²⁰⁾や飯田ら⁽²¹⁾の研究では高学年の方がリーダーシップ行動が高かったのに対し、本研究では学年差が見られないという異なる結果となった。これは本研究の主体的傾向は自己評定による行動傾向であり、リーダーシップ行動を含む積極的行動に対する一般的な構えを意味するのに対し、倉本や飯田らの研究は、異なる学年が同一のキャンプに参加したときの観察された具体的なリーダーシップ行動であるという違いからくると考えられる。また、倉本も述べているが、同じ学校からの参加者が多く、学校生活での傾向がそのまま現れ、上級生がリーダーシップをとっていたことが考えられる。キャンプにおけるリーダーシップ行動の発現に関して、発達的な学年

差があるのか、状況依存的な要素が強いのかの検討は今後の課題となろう。

5 パス解析による検討

「主体的傾向(主体的積極的行動傾向)」は、キャンプ生活を通じて身につけて欲しいと考えられる行動傾向であり、同じくキャンプを通じて体験が増加すると考えられる「野外体験」「調理体験」「工作体験」等の生活体験を基礎として身につく行動傾向と考えられる。また、これらの生活体験の増加には、「学年」や「テント泊経験」も影響すると考えてよからう。以上のような考え方にもとづき探索的にパス解析を行った。また、谷井ら⁽²²⁾によると、男子のけがの発生率はテント泊経験に伴い増加するのに対し、女子のけがの発生率はテント泊経験に伴い減少する。このことは、テント泊経験や自然体験のもつ意味が男女によっていくぶん異なることを意味している。そのため、パス解析については男女別に行うことにした。

図7に示すように、主体的傾向に対して、野外体験(.31)、調理体験(.24)、工作体験(.10)がそれぞれ直接の正のパスをもち、学年(-.13)は負のパスをもっている。これは、

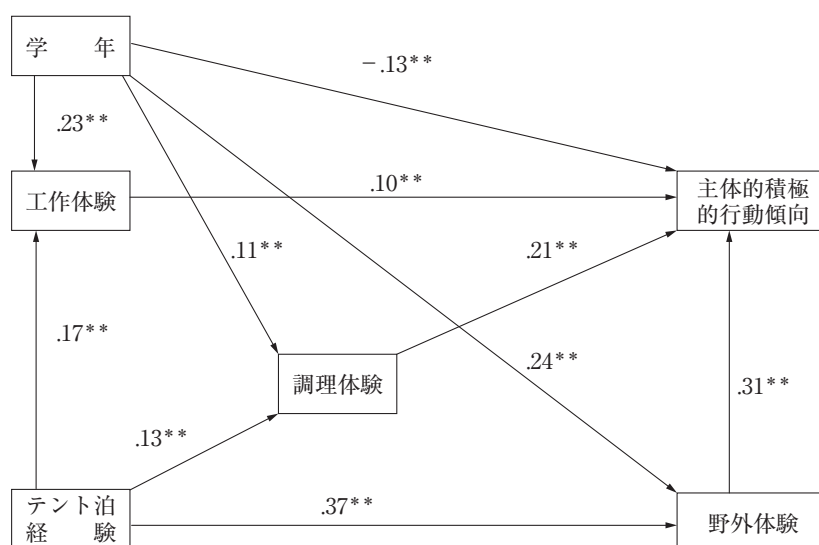


図7 男子の主体的積極的行動傾向に影響を与える変数モデル

野外体験，調理体験，工作体験がこの数字の示す順の大きさを主体的傾向を高めていることを意味している。学年のパス係数がマイナスになっていることについては（各種経験の増加を伴わずに）学年のみが増加するとそれは主体的傾向を低める働きをすることを意味する。一方，学年は，野外体験(.24)，調理体験(.11)，工作体験(.23)に正のパスをもち，これら3つの生活体験を高めることにより間接的に主体的傾向に正の影響を与えている。テント泊経験も同様に，野外体験(.37)，調理体験(.13)，工作体験(.17)に正のパスをもち，間接的に主体的傾向に正の影響を与えている。

これらのことを総合するとこのパス図は次のように解釈できる。学年が進行するに従い，さらにテント泊経験が多い程，野外体験，調理体験，工作体験はそれぞれ増加する。そして，とくにこれらの体験（とりわけ野外体験）が豊かな程，「負けずぎらいで，積極的に班長やリーダーを引き受け，何かをする時に自分が中心となって決定し，ものごとの計画や準備などを進めることを好む傾向」を意味する「主体的傾向」は高くなる。ところが，学年の上昇に見合った生活体験の増加が見られず，単に，学年のみが上昇した場合，そのことはかえって主体的傾向を低める働きをしている。実際，前項で示したように，主体的傾向の平均値は男女別でみると男子がやや高いが，学年による差はほとんど見られなかった。つまり，集団活動におけるリーダーシップ行動という側面を含む「主体的傾向」は，児童生徒の野外体験，調理体験および工作体験が増加することにより高められるが，にも関わらず，この傾向自体は学年進行に伴って増加してはいない。これは，学年進行にともなって主体的傾向を高く維持しつづけることが困難であることを意味していると考えられる。

小学生の間は，単純に積極性があり責任感がある児童生徒がリーダーシップを発揮し，周囲

もそれを認める土壤があるのだろう。しかし，学年が進むにつれて，この種の単純な積極性だけでは集団の中でリーダーシップが発揮できなくなるのではないだろうか。つまり，他人の気持ちに配慮したり，集団全体の意向を微妙に察知したり，押すべきところ引くべきところ等の状況判断ができる能力，いわゆる対人関係調整能力が身についた積極性でないと集団活動においてリーダーシップが発揮できないことを意味しているのではないか。以下では，この仮説を前提にして少し考察を進めてみる。

この種の対人関係調整能力は当然のことながら集団活動の中で身につく能力である。集団の中での対人的交流を通じて，相手が自分の行動に対してどのように感じ，どのように反応しているかを判断し，以後の自分の行動を選択していく。この判断が適切な場合もあれば，不適切な場合もあるだろう。しかし，それも次の自分の行動に対する相手の反応から，判断を修正し，行動を修正することができる。「自分の行動」―「相手の反応」―「それに対する自分の判断」―そして「次の自分の行動」というサイクルの繰り返しの中で，スムーズな対人コミュニケーションについての能力が形成されていくと考えられる。全国子ども会連合会⁽²³⁾は，子ども会のジュニアリーダーとして活動しているもの（JRと略す）と，そうでない者（非JRと略す）を比較している。JRは非JRに比べて，「何かやろうとするときいつもリーダーになってやる方だ」「みんなの前で自分の意見をはっきり言える」などのリーダーシップ特性についての自己認知が高く，また，JRは非JRより，「お互いのプライバシーを尊重する」や「一人の友達と特別親しくするよりもグループ全体で仲良くする」など集団志向的であるとしている。このことは間接的ではあるが，子ども会活動等の集団活動経験が対人関係調整能力を伴ったリーダーシップを育成する役割を果たす可能性を示

唆している。

学年の上昇に伴って、野外体験、調理体験、工作体験が増加し、これらの体験がそれぞれ主体的傾向を高めているにも関わらず、主体的傾向自体は学年進行にともない増加しないという結果は奇妙な気がする。この結果は、集団の中でリーダーシップを発揮する構えを意味するこの行動傾向が、学年進行に従い、対人関係調整能力を伴ったより洗練されたものにならないと集団場面で発揮するのがむづかしいという特質をもっているためではないか。すなわち、現代の青少年にとって集団の中で洗練されたリーダーシップを発揮するというスキルを獲得しにくい状況があることを意味するように思われる。この背景についてももう少し考えてみる。

長田⁽²⁴⁾は総務庁青少年対策本部の「第5回・青少年の連帯感などに関する報告書」(1991)⁽²⁵⁾を分析し、現代青少年の仲間関係は、仲間の数や仲間の性別でみるかぎり好調になっているが、それはソーシャルスキルの不足が幸いしての結果であることを指摘している。ソーシャルスキルとは、他者との付き合いに必要なスキルのことであり、本来、このスキルを身につけた結果、他者との間に一定の距離をとることができるようになる。しかし、長田によると、今の青少年はこのスキルを身につけていないために、対人関係に臆病になって他者との間に距離をおくようになり、皮肉にもこのことが青年の仲間関係の円滑化に役立っているという。総務庁青少年対策本部の1995年の調査⁽²⁶⁾では、親友の増加傾向はさらに顕著で、例えば高校生(15歳~17歳)で、親友の数が4人以上と回答した割合は男子で84.7%、女子で83.4%と急増し、親友が10人以上の割合も男女ともに40%を超えている。先の1991年の総務庁の報告書の高校生の場合をみると、親友が4人以上の割合が、1980年で26.6%、1985年で32.5%、1990年で35.2%と微増の傾向が認められるが、1995年にかけて

の増加はきわめて急激である。これにはポケベル、PHS、携帯電話という移動式通信機器の普及の影響が考えられ、それに伴って「親友」という言葉のもつ意味が激変したと考えられる。総務庁の「青少年の友人関係に関する国際比較調査」報告書⁽²⁷⁾によると、日本では、「友だちといっしょにいると安心できる」が86.4%、「友だちとはなるべく争いごとをしないようにしている」が67.3%で、これは西ドイツの場合もほぼ同程度であるが、「友だち関係はわりとあっさりしている」については、日本が65.4%であるのに対し、西ドイツは8.5%と大きな開きがある。また、「友だちが悪いことをしたら注意する」、「気の合わない者とのつきあいは避けるほう」、「浅く広くよりひとりの友だちとの深いつきあいを大切にする」などの項目で、日本の青少年は西ドイツよりも15ポイント程度割合が低い。このことは日本の青少年は友人との深いつながりをもとめながらも、その一方で、友人関係で傷つくことを恐れ、できるだけ表面的にあっさりとした仲良くふるまっていこうとする傾向があることを示している。移動式通信機器の普及はこの傾向に拍車をかけたのではないか。友だちをもとめながらも傷つくことを恐れる青少年にとって、通信機器を通しての守られた交友関係の出現はまさにもとめていたニーズに適合したものであったのであろう。観点を変えれば、親友を得ることの敷居が低くなったとも言える。メールアドレスや携帯電話の番号を交換するだけで、広くて浅いようなそれでいていつでも深い関係に発展していけそうな新しい交友関係が簡単に構築できる時代になってきたのであろう。

以上、見て来たように、現代の青少年の仲間関係は表面的で、ソーシャルスキルに乏しく、結果的に幸いにも、一定程度の距離を保ちながら円滑さを保っている。そして、このような状況は、本研究で扱っている主体的傾向のような

集団の中でリーダーシップを発揮する行動特性を青少年が成長に伴って維持発展させにくい状況であると考えられる。

保坂⁽²⁸⁾は仲間関係の発達に関して、小学生のギャング・グループ、中学生のチャム・グループ、高校生のピア・グループという発達モデルを提案している。そして、最近の特徴としてギャング・グループの消失とチャム・グループの肥大化があるという。チャム・グループとは、同じ興味・関心やクラブ活動などを通じて結ばれる仲良しグループで、お互いの共通点や類似性を言葉で確かめ合うという特質を持っている。保坂は福富⁽²⁹⁾の調査を例にあげ、このグループの特性として、「仲間はずれになりたくない」、「仲間といっしょに行動したい」、「仲間うちの流行に遅れたくない」などの強い同調性が見られるが、それは、心理的に一定の距離を置いた、表面的な同調であることを指摘している。そして、今日、この年齢段階で多発している陰湿ないじめは、自分たちだけでは集団のまとまり（凝集性）を維持できないために、「スケープゴート（いけにえ）」としてのいじめの対象を必要とするために起きているとも考えられると述べている。集団のまとまりを維持する

ためには、個人のレベルでは、洗練された対人関係調整能力が必要であり、その育成のためには、自然体験活動や集団活動体験の機会を数多く青少年に対して提供する必要がありますが大きくなっている。

ここまで、主体的傾向が学年の上昇につれてストレートに増加しない理由について検討してきたが、確かに、集団の中でリーダーシップを発揮することは、集団の表面的な円滑さを阻害するという側面がある。従って、日常レベルでの仲間集団においていきなり積極的な行動を発揮するのはむづかしいかもしれない。だからこそ、日常を離れた（それは地理的にも、時間的にも、人間関係の面でも）場での、集団活動の機会を提供する意義は大きいと考えられるのだ。

女子についてはどうであろうか。図8に示すように、主体的傾向に対して、野外体験(.25)、調理体験(.12)、工作体験(.14)がそれぞれ直接の正のパスをもち、学年(-.11)は負のパスをもっている。これは男子の場合のパス図とほぼ同じであるが、数値的には、野外体験と調理体験が主体的傾向を高める効果は、女子は男子に比べて小さいのに対し、工作体験の影響

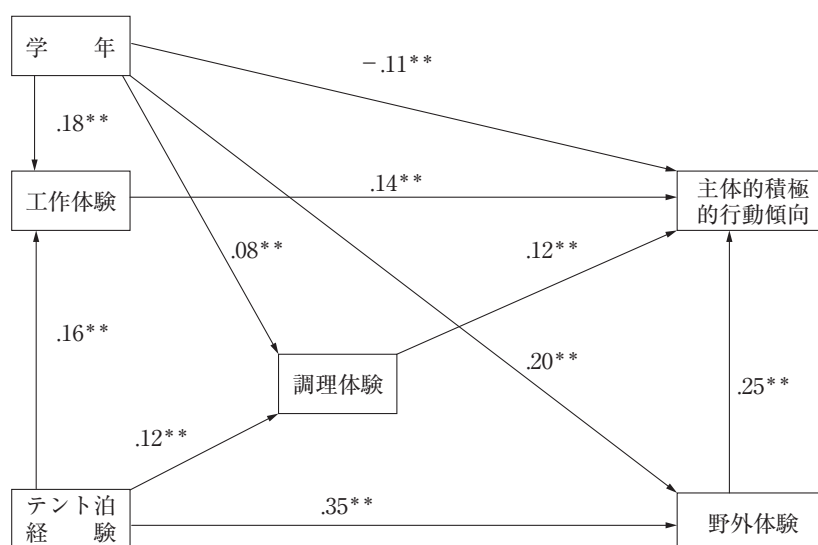


図8 女子の主体的積極的行動傾向に影響を与える変数モデル

は女子の方がやや大きい。また、学年が主体的傾向に対して負のパスを持っている点も男子と同様である。学年は、野外体験 (.20), 調理体験 (.08), 工作体験 (.18) に正のパスをもち、これら3つの生活体験を高めることにより間接的に主体的傾向に正の影響を与えている。テント泊体験も同様に、野外体験 (.35), 調理体験 (.12), 工作体験 (.16) に正のパスをもち、間接的に主体的傾向に正の影響を与えている。これらは男子の場合と数字はわずかに異なるがほぼ同様の結果と考えて良からう。すなわち、男子の場合に検討したことがすべて女子にもあてはまると言えよう。

男女を比較した場合、女子ではノコギリやノミなどを使う工作体験が主体的傾向を高める効果がいくぶん大きい。学年別の工作体験の分散分析結果で述べたが、工作体験の豊富さは女子にとって性役割意識をこえた積極性の指標としての意味を持ち、そのため主体的傾向との関連が男子よりやや大きいのであろう。

対人関係調整能力との関連についても男子と同様のことが女子の場合にも言える。すなわち、集団の中でリーダーシップを発揮するという行動傾向が、学年進行に伴って、対人関係調整能力という洗練された側面をあわせもったものにならないと主体的傾向を高く保つことは困難であると考えられる。保坂⁽³⁰⁾も述べているが、チャム・グループにおけるお互いの共通点・類似性を言葉により確かめあう面は男子よりも女子において特徴的に見られる。その集団でしか通じない言葉を作りだし、その言葉がわかるものだけが仲間であるという境界がひかれるという。しかし、この仲間関係は言葉さえ共通で使っていれば仲間でありうるという側面を持ち、これまで述べてきた表面的で希薄な人間関係を維持するメカニズムとしては優れたものであるという見方も可能だろう。

Ⅳ ま と め

学年が進行するに従い、さらにテント泊体験が多い程、野外体験、調理体験、工作体験はそれぞれ増加し、そして、これらの体験が豊かな程、「負けずぎらいで、積極的に班長やリーダーを引き受け、何かをする時に自分が中心となって決定し、ものごとの計画や準備などを進めることを好む傾向」を意味する「主体的傾向（主体的積極的行動傾向）」は高くなることがわかった。この主体的傾向は「生きる力」の一部をなす行動傾向であると考えられ、生きる力の育成に自然・生活体験が重要な役割を果たすことが部分的ながら実証された。また、学年の増加に見合った自然・生活体験の増加がない場合は学年の増加は主体的傾向を低めることが分かった。主体的傾向が学年の上昇に伴って増加しない点に関して、今日の青少年が友人関係で傷つくことを恐れ、できるだけ表面的にあっさりつきあっていこうとする傾向があることを踏まえた考察をおこなった。そして、今日の青少年が、日常レベルでの仲間集団において積極的なリーダーシップを発揮するのはむづかしい状況に置かれており、だからこそ、日常を離れた場で自然体験活動や集団活動の機会を提供する意義は大きいことを指摘した。

工作体験は、小4時点では男女差が見られたが、小学校高学年で女子がキャンプ体験にともなって工作体験を増加させる結果、中1では男女差がなくなった。しかし、中学生になると女子は工作体験を増加させないため、中2以降再び男子の工作体験が高くなった。小学校高学年の女子は性役割にとらわれずにキャンプ生活の中でのびのびと工作体験を増加させている。しかし、中学生以上になると、女子はキャンプ生活の中で再び、工作役割を男性の役割ととらえ、積極的に取り組まなくなる傾向があると考えられた。すなわち、中学1年から2年をかけ

て女子の性役割意識の重要な転換点があることが示唆された。

引用・参考文献

- (1) 第15期中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第15期中央教育審議会第一次答申）」文部省，1996.
- (2) 第16期中央教育審議会「幼児期からの心の教育の在り方について（第16期中央教育審議会答申）」文部省，1998.
- (3) 青少年教育活動研究会（代表：斎藤哲郎）「子どもたちの自然体験・生活体験等に関する調査研究」青少年教育活動研究会，pp. 9-23，1996.
- (4) 青少年教育活動研究会（代表：平野吉直）「子どもの体験活動等に関するアンケート調査報告書」青少年教育活動研究会，pp. 46-48，1999.
- (5) 子どもの戸外活動研究会「子ども（幼児，小・中学生）の戸外活動の実態及び教育効果に関する学際的研究」伊藤忠記念財団平成7年度調査研究報告書，pp. 97-115，1996.
- (6) 安原昇・藤土圭三・小柳晴生「青少年健全育成とその指導に関する調査研究—生活経験の幅と量が自己教育力に及ぼす効果について—」マツダ財団研究報告書，1，pp. 51-58，1987.
- (7) 三浦清一郎編著「現代教育の忘れもの」学文社 pp. 1-26.
- (8) 飯田稔・井村仁・影山義光「冒険キャンプ参加児童の不安と自己概念の変容」筑波大学体育科学系紀要，11，pp. 79-86，1988.
- (9) 倉本満枝「小学5・6年生のキャンプにおけるリーダーシップの研究—人気と性格に関連して—」，野外運動研究，1979，3(1)，pp. 33-44，1979.
- (10) 飯田稔・遠藤浩・平野吉直「冒険キャンプの危機場面における児童のリーダーシップ行動」筑波大学体育科学系運動学類運動学研究，2，pp. 77-84，1986.
- (11) 谷井淳一・井上透「小・中学生対象のキャンプにおけるけが・病気の発生状況に関する研究」，野外教育研究，3(1)，pp. 25-36，1999.
- (12) 東清和・小倉千加子「性差の発達心理」大日本図書，pp. 195-202，1982.
- (13) 間宮武「性差心理学」金子書房，pp. 249-255，1979.
- (14) Smith, S "Age and sex differences in children's opinion concerning sex difference" *Journal of Genetic Psychology*, 54, pp. 17-25, 1939.
- (15) 遠藤徹・内藤哲雄「中学生の悩みⅡ」日本心理学会第42回大会発表論文集，1978
- (16) 前掲(13)
- (17) 前掲(14)，pp. 17-25.
- (18) 関智子・飯田稔・橘直隆「キャンプカウンセラーの性役割がキャンパーの性役割に及ぼす影響」，レジャー・レクリエーション研究，33，17-23，1996.
- (19) 関智子・飯田稔・岡村泰斗「キャンプ体験が女子高校生の性差観の変化に及ぼす影響」日本野外教育学会第3回大会プログラム・研究発表抄録集，48-49，2000.
- (20) 前掲(9)
- (21) 前掲(10)
- (22) 前掲(11)
- (23) 全国子ども会連合会 子ども会活動等の団体活動等の団体活動経験者の行動特性に関する調査 全国子ども会連合会，pp. 10-17，1995.
- (24) 長田雅喜「仲間・家族と現代青年」，久世敏雄編「現代青年の心理と病理」福村出版 pp. 111-123，1994.
- (25) 総務庁青少年対策本部編「現代の青少年—第5回・青少年の連帯感などに関する調査報告書」，1991.
- (26) 総務庁青少年対策本部編「日本の青少年の生活と意識—青少年の生活と意識に関する基本調査報告書—」，1997.
- (27) 総務庁青少年対策本部「青少年の友人関係—青少年の友人関係に関する国際比較調査報告書」，1991.
- (28) 保坂亨「学校を欠席する子どもたち—長期欠席・不登校から学校教育を考える—」東京大学出版会，pp. 219-238，2000.
- (29) 福富護「思春期が人生の中でもつ意味—自分探しの原点—」，児童心理（金子書房），第51巻第3号，pp. 3-12，1997.
- (30) 前掲(28)